

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

●理事長メッセージ	1
●2013—2014年度 役員選挙結果発表／ 2013年新年賀詞交換会	2
●keikoのNY通信	3
●スコットランドの川	4

理事長メッセージ

早いものでJAIPの事業年度も第四四半期中盤に差し掛かっております。年度末、あるいは新事業年度・新学期を迎えるこの時期、皆さま方におかれましては多忙な日々を過ごされていることと存じます。

さて、2012年は政権交代があり政治経済分野においても大きな変動がありましたことは皆様ご周知の通りです。当業界にとりまして最大の関心事は、デフレ不況による売り上げの伸び悩みが挙げられます。民間企業においては予算の縮小が当業界の需要低下に直接繋がっております。大学、官公庁市場では当初の円高の恩恵もあり、定期刊行物のキャンセルは比較的少量に留まったものの、入札時の過当競争等により採算ラインには程遠い状況です。

書籍市場におきましても益々電子化が加速しています。出版者、取次店、ユーザー3者の関係を見ますと、そこはWin Winの関係はなく、出版者＝Win、取次店＝Lost、ユーザー＝Winの様相を呈しており我々取次店にとっては当市場でも苦戦を強いられております。

第三四半期後半から第四四半期は、安倍内閣の日本経済再生プログラムの大きな目玉である円高・デフレ対策による急激な円安政策が売上原価の比率を大きく高めて業績を圧迫しています。円安政策が当業界にとって受注・仕入れ活動に与える最大ポイントになりそうです。また、同内閣は科学技術を国家戦略として推進してお

り、民間企業に対する研究開発税制の拡充と、官民挙っての研究開発投資が当業界にも色濃く反映されることを切に望んでおります。

財務省は、2014年4月から消費税率を8%に引き上げると同時に、現在課税されていない海外からインターネットで配信される情報、音楽配信等に消費税を課税する方針を打ち出しています。今後益々普及するであろう電子情報（電子ジャーナル、電子書籍等）に対する課税が実現しますと、ユーザーの負担は増しますが、我々取次店にとっては同業の外資系企業との競争力は増大すると思われます。但し、このことは海外からの電子配信商品に限ったことであり、ユーザーがそれ以外の商品を海外企業と直接取引を行った場合は従来通り不課税扱いであり、依然として税の不公平感は否めませんし、税率が上がれば上がるほど競争力の弱体化が懸念されます。

3月の年度末まで残り日数が少なくなりましたが、会員各位におかれましては年度末商戦が業績にプラスになることを願いつつ今回のご挨拶とさせていただきます。

以上

2013年2月6日

日本洋書協会
理事長 山川 隆 司

2013-2014年度 役員選挙結果発表

役員選挙の開票が2月15日に絵本の家にて行われ、以下の通りとなった。

開票結果（カッコ内は協会代表者（敬称略））

【理事】 当選	丸善(株)（土方裕之）	35 票
	UPS 社（マーク・グレッシャム）	31 票
	ユサコ(株)（山川隆司）	29 票
	(株)極東書店（相澤久俊）	23 票
	センゲージ ラーニング(株)（松村達生）	22 票
	(株)絵本の家（小松崎敬子）	20 票
次点	(株)南江堂	12 票

選挙管理委員会

委員長：	小松崎敬子	〔株式会社絵本の家〕
委 員：	伊藤 道一	〔株式会社イタリア書房〕
	木原 健策	〔東京洋書株式会社〕
	鈴木 修	〔株式会社三省堂書店〕
	武井 文子	〔株式会社絵本の家〕
	深町 恒之	〔トムソン・ロイター・プロフェッショナル(株)〕
	藤原 弘行	〔株式会社マイブックサービス〕
事務局：	正田 実	

【監事】 当選	日本出版貿易(株)（宮川修）	17 票
	(株)ゲーテ書房（唐澤廣憲）	13 票
次点	(株)南江堂	12 票

2013 年新年賀詞交換会

今年の新年賀詞交換会は1月11日（金）に港区六本木の国際文化会館本館宴会場にて盛大に行われました。今年も大勢の方々にお集まりいただき（45 社 127 名 内特別参加 6 名）午後6時に開会しました。

最初に新年のご挨拶を協会理事長の山川氏（ユサコ）にいただきました。今年は理事の改選ということで各理事の方々のご紹介もございました。

続いて乾杯のご挨拶を中林氏（日本出版貿易）にいただき、パーティーの開宴となりました。今年も食事、

飲み物も多数取り揃えて頂き、皆さん最後まで食事、アルコールと会話交えながら楽しんでいただいたと思います。あっという間に時間は過ぎ、8時頃、土方氏（丸善）に中締めのご挨拶と一本締めに頂いて閉会となりました。その後も会場のご好意で30分の延長を頂きほとんどの方が最後まで有意義な時間を過ごされたかと思えます。

次回も多数のご参加お待ちしております。

（RT 記）



Keiko の NY通信 No. 4

この原稿を書いている2月9日(土)はニューヨークを含めた北東部が暴風雪に襲われた夜の次の日。幸い、マンハッタンや自宅そばのブルックリンでは積雪20 cm程度で終わりました。昨冬は全く出番がなかったゴムの長靴と暖かいフリースの靴下を履いて外の様子を見に行くと、マンハッタンが一望できるブロンクスの散歩道でクロスカントリーを楽しんでいる女性を発見。さすがニューヨーク!なんでもありです。

気づけばすでに2月1月は来年度に向けた予算編成の時期にあわせ、連日マーケティングのプランニングミーティングを毎朝ケンブリッジ本社と開催。パタパタの日々に追われる中、1月末にはAmerican Library Association(ALA)のMidwinter Meetingに参加するためシアトルに出張してきました。ALAは公共図書館員、大学図書館員、学校図書館員、企業図書館員とあらゆるアメリカ図書館員で構成される協会で、年に2回、夏と冬に大会が開催されます。

ALAには複数の分科会が存在しますが、最大の分科会がACRL(Association of College & Research Libraries. 12,000以上の高等教育機関の図書館員がメンバーになっている)で、当出版局のコアなターゲットでもあります。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、そのACRLのResearch Planning and Review Committeeが『2012 top ten trends in academic libraries,』と題して、学術図書館を取り巻く環境を図書館員の視点でまとめた資料があります。もともとは2010年にまとめられたものですが、昨年のALA Midwinterの会合でその内容について再度議論され、昨年6月に改めて発表されました。来年度に向けたプランニング作業の中で改めて現状を確認する良い材料となったので、ここで簡単にその内容をご紹介します(ご紹介する順番は英語のアルファベット順です)。

1. Communicating value

学術図書館は母体となる大学に対しその存在価値をきちんと証明しないといけない。大学のミッションの実現にどう貢献し、学生や教員の受け入れ、成長にいかに関与するのか。図書館資料の利用率が学生の成績にどう影響を与えているかなど、結果ベースのアプローチを奨励。

2. Data curation

クラウドベースのレポジトリが増えるなど、あらゆるデータの管理方法が進化しつづける状況に対応する必要がある。図書館は今後のデータの保管、管理、再利用に重要な役割の担うことになる。

3. Digital preservation

希少本や特別コレクションの保存方法としてデジタル化が進んでいるものの、包括的な計画や確固たる方針が欠けている。

る。また、Born-digitalのコレクションの保存方法についても資金調達や専門知識が足りていないことを指摘。

4. Higher education

講義や学位のオンライン化、大学のグローバル化など、高等機関を巡る環境の変化は図書館の収集方法や情報提供方法に大きな影響を与える。これまでの利用者と今後の利用者両方のニーズに応える必要がある。

5. Information technology

テクノロジーは今後の学術図書館のあり方を考える上での原動力となる。ソーシャルネットワーク、オープンコンテンツなど出版のパラダイムの変化に伴い、利用者からは新しい要求が出てくる。

6. Mobile environments

モバイルデバイスは、情報の提供方法およびアクセス方法を急速に変えている。携帯端末、タブレット端末を持つ学生が増え、学術目的でアプリやタブレットを利用する利用者が増えている。

7. Patron driven e-book acquisition

PDAが電子ブック購入モデルの規範となる。支出額に見合った図書館の価値を証明するのに必要不可欠。効率化を実現するだけでなく、利用者の要求により沿った図書館資料の収集を実現する。今後は「持続可能な」電子ブックの収集が重要となる。

8. Scholarly communication

学術コミュニケーション、出版モデルの変化が進んでいる。オープンアクセスモデルや電子テキストブックなど、学術雑誌、論文、テキストブック、デジタル資料の新しい出版モデルの発展に図書館として関わっていくことが重要。

9. Staffing

図書館を巡る状況の変化や新しい課題に対応できるスタッフの教育及び雇用の確保。データ管理、デジタル資料の管理や保存、評価、学生や教員に対するサポートの提供などにおいて新しいスキルが必要とされている。

10. User behaviors and expectations

情報探求には利便性が全てである。いつでもどこでもすぐ情報にアクセスできる利便性が重要。図書館員による人的サポートにもすぐにアクセスできる利便性が求められている。

ここに挙げられた10のトレンドは、ここ最近最も言及され議論されている課題のようです。これらの課題にどう対応して学術情報社会がどう変わっていくか、今度も図書館員の発する情報に耳を傾けていきたいと思っています。

平野圭子@ニューヨーク

2013年2月

“2012 top ten trends in academic libraries : A review of the trends and issues affecting academic libraries in higher education

<http://crln.acrl.org/content/73/6/311.full>

スコットランドの川

まだまだ続く蒸留所巡り、今回は2年ぶりにスコットランド旅行を試みました。

10月9日夕方ロンドンに到着して一泊。翌朝ユーストン駅8:30発の列車に飛び乗りグラスゴーに向かいました。グラスゴーにはターミナル駅が2つあり、到着したのはセントラル駅13:01。ホテルへ立ち寄る間もなく、通勤電車のような路線に乗り換えて30分、ダルミューア(Dalmuir)駅で降車。そこから歩いてさらに30分。ローランド・モルトを代表するといっよいオーヘントッshan(Auchentoshan)の蒸留所に辿り着きました。

蒸留所はハイウェイ沿いの広大な敷地にあり、起伏もあるのでさながらゴルフコースの感じで、噴水のある広い池が一つのアクセントになっています。門を入れて暫く行くと守衛室があり、まずヴィジターセンターに寄るように指示されます。舗装道に足跡の形をした白い目印が点々と続いているので間違わずに行けます。まず案内された部屋で蒸留所の歴史と現状を伝える短いビデオを見た後、ショップに行き物色します。ヴィンティッジ物や年代物が陳列棚狭しと並んでいますが、なかなか手が出ません。Stillman's Collection(蒸留職人の蒐集)と称した、箱に小瓶が3つ入った手頃なものが目に入りました。それぞれ蒸留後1年、2年、3年と少しずつ色付いていく熟成の度合いが一目瞭然で、なるほどと思い買ってみました。オーヘントッshanは12年物が標準なので、それより10年くらい若いモルトです。3年熟成は何かウイスキーらしさが出てきますが、1年しか経っていないものは寧ろ度数の高い焼酎や泡盛と言った方が近いかも知れません。ローランド・モルトはアイルランド・モルト同様に3回蒸留されますが、素直で飲みやすいのが特徴です。しかし香りはしっかりと付いています。

ショップを出て外の休憩所で一休みしながら、蒸留所全景などを写真に収めて立ち去りました。ダルミューア駅に戻って電車に乗り、帰りはグラスゴーのもう一つのターミナル駅、クイーン・ストリート駅に到着です。

グラスゴー1泊の翌朝クイーン・ストリート駅7:06発の列車で先ずインヴァネスへ北上し、乗り換えて更に北上。ブローラ(Brora)駅12:53着でそれから歩くこと

30分、ハイランド・モルト最北の蒸留所の一つクライヌリッシュ(Clynesh)に到着です。小高い丘の麓にあり、周りはほとんど牧場で牛があちらこちらに寝そべっています。

クライヌリッシュ蒸留所はグレンモレンジ蒸留所に比較的近いところにあり、味わいも近いものがありますが、ややフルーティで最近気に入っているウイスキーの一つです。ショップも充実していて、近隣の人たちもウイスキーを買いに来ている様子でした。

その日はインヴァネスに戻って3連泊の始まりです。中2日を使ってスペイサイドの蒸留所を幾つか回る魂胆でした。

さてスコットランドの3日目は前日の天気予報通り雨でした。それも時おり雨足強く蒸留所巡りは無理と判断しました。そこで朝から天気予報と睨めっこをしながら雨の降っていない、あるいは早めに止みそうな場所を探りました。エディンバラやグラスゴー辺りは晴れマークです。エディンバラに近いスターリング(Stirling)に目を付けました。実はインヴァネスの次に投宿予定の地ですが、ここには蒸留所はなく、もともと観光をするつもりで1泊の予定でした。小エディンバラといわれるこの地はその昔スコットランド独立の拠点となったところだそうで、鉄道で通り過ぎる度に気になっていた場所でした。何が気になっていたかという、エディンバラあるいはグラスゴーから鉄道で北上してスターリングを過ぎるとすぐに右側車窓、方角でいえば東側に高い塔が見えます。案内書によるとスコットランド独立の立役者ウィリアム・ウォリス(William Wallace)を記念した、その名もウィリアム・ウォリス・モニュメントという塔だということでした。早速塔を目指して歩きました。歩くこと30分でちょっとした山の麓に着き、今度は結構険しい山道を10分ほど登りようやく到着です。塔の中は博物館になっていて、何層もの狭いフロアがこれまた狭い螺旋階段で繋がれています。ウィリアム・ウォリスの像、彼が使った長剣、スコットランド出身の名士の胸像などが陳列されています。最上階は展望室になっていて、スターリングの町を始め周辺一帯が眺望できます。スターリングの町は古い街並みの残る落ち着

いた所で、小高い丘の上にはスターリング城が聳え立っています。小エディンバラと言われる所以でしょう。

4日目は曇り空ではありませんでしたが、インヴァネス駅9:00発、エルギン駅9:40着でそこからバスに揺られること40分、念願のアベラウアー(Aberlour)に到着です。バス停から歩いて10分足らずでアベラウアー蒸留所に着きます。まず大通り沿いにお伽の国から出てきたような可愛らしい建物が目に入ります。ヴィジターセンター兼ショップです。そこから50メートルばかり奥に入ったところに、小洒落た蒸留所があります。手前に花壇と植え込みを設え、どこから見ても絵になる風景です。アベラウアーは微かにミントの風味を備え、またフルーティな味わいもある飲みやすい銘酒で、何でもフランス人に人気があると聞いています。ブランデーとはまた違った味わいの蒸留酒ということなのでしょう。アベラウアーの町の畔には彼のスペイ川が流れています。この日は昨日から早朝まで降っていた雨のお蔭で、滔々とした水量の素晴らしい姿を見せていました。周囲の木々の紅葉も素晴らしく、川辺のベンチで休みながら暫しその光景に見入っておりました。スコットランドには幾つかの大河があります。グラスゴーの街なかを流れるクライド(Clyde)川、パース(Perth)のテイ(Tay)川、スターリングのフォース(Forth)川などはそれぞれ街のアクセントになっていますが、このスペイ川ほどウイスキーとの関連で話題となる川は他にはありません。スペイサイドの蒸留所群の大動脈と言ったところでしょうか。

エルギンの町に戻ってから西の方に30分ほど歩いて今度はグレンマレイ(Glen Morey)蒸留所を訪れました。今日のおまけの蒸留所訪問です。スペイサイドの端に位置する地味な蒸留所で、日本ではあまり見かけない銘柄ですが、すべての点で中庸を得たというべき飲みやすいウイスキーです。



クライヌリッシュ蒸留所

5日目は既に2日前に遠足をすませていたスターリング泊ですが、既に観光は済ませていますので、宿に荷物を置いてすぐにリンリスゴー(Linlithgow)へ出かけました。リンリスゴーにした理由は2つあります。1つは悲劇の女王メアリ・ステュアートが生まれたリンリスゴー宮殿を見ること、もう1つはセント・マグダレン(St. Magdalene)蒸留所跡を見ることでした。リンリスゴー宮殿は15世紀に時のスコットランド王ジェームス1世が建造しスコットランド王室お気に入りの宮殿だったそうです。後に一部火災崩壊しましたが、外観はほぼ保たれ、現在では風光明媚なリンリスゴー湖とともに英国王立公園となっています。宮殿もさることながら隣接するセント・マイケル教会も威容を誇っています。

さてセント・マグダレン蒸留所ですが、1983年に操業停止したあとは遺構のみが残り今では住居や事務所などに転用されています。もうお酒の匂いはしませんが、外観の雰囲気は煙突をはじめ味があります。建物の裏手にはフォース川が流れ、その先はエディンバラ北端のフォース湾に注いでいます。この蒸留所のウイスキーは元来すべてブレンド用のモルトとして使われていたようですが、操業停止後に残ったものはシングルモルトとして熟成が続けられ、まだストックとしては存在しています。ボトリング会社によって買われた樽は瓶詰にされてリンリスゴーの名前でも売り出されています。しかし今となっては年代物だけが残っていて、なかなかありつけるものではありませんが、何処かでお目にかかりたいものだと思っています。

今回は雨に一日たたられるなどして、所期の目的地スペイサイドのダフタウン再訪はなりませんでしたが、あまり酒臭くならずに帰還いたしました。

(エルゼビア・ジャパン(株) 桑原七男)



セント・マグダレン蒸留所遺構

司馬遼太郎の長編歴史小説 「坂の上の雲」 英訳本 (全4巻)

*"Shiba Ryōtarō is Japan's best-loved author, and **Clouds above the Hill** is his most popular and influential work. In it he celebrates the transformative spirit of Meiji Japan and examines Japan's unexpected victory in the Russo-Japanese War; providing a thoughtful and thought-provoking perspective on those dramatic times and the people at their center. This distinguished translation of a modern classic is a landmark event"*

- Donald Keene, University Professor Emeritus, Columbia University

Clouds above the Hill

A Historical Novel of the Russo-Japanese War Volume 1 & Volume 2

By Shiba Ryōtarō

Edited by Phyllis Birnbaum

Translated by Juliet Winters Carpenter, Andrew Cobbing and Paul McCarthy

Volume 1 December 2012 416 pages
Hardback 978-0-415-50876-6 £49.95

Volume 2 December 2012 440 pages
Hardback 978-0-415-50884-1 £49.95

Clouds above the Hill is one of the best-selling novels ever in Japan, and is now translated into English for the first time. An epic portrait of Japan in crisis, it combines graphic military history and highly readable fiction to depict an aspiring nation modernizing at breakneck speed. Best-selling author Shiba Ryotaro devoted an entire decade of his life to this extraordinary blockbuster, which features Japan's emerging onto the world stage by the early years of the twentieth century.

Volume I describes the growth of Japan's fledgling Meiji state, a major "character" in the novel. We are also introduced to our three heroes, born into obscurity, the brothers Akiyama Yoshifuru and Akiyama Saneyuki, who will go on to play important roles in the Japanese Army and Navy, and the poet Masaoka Shiki, who will spend much of his short life trying to establish the haiku as a respected poetic form.

In Volume II, Meiji Japan is on a collision course with Russia, as Russian troops stationed in Manchuria ignore repeated calls to withdraw. Admiral Togo leads a blockade and subsequent skirmish at the strategically vital and heavily fortified Port Arthur, whilst Yoshifuru's cavalry in Manchuria maneuvers for position as it approaches the Russian Army lines. The two armies clash at the battle of Liaoyang, where Japan seals a victory which shocks the world.

続巻刊行予定

Volume 3 November 2013 Hardback 978-0-415-50887-2 £49.95

Volume 4 November 2013 Hardback 978-0-415-50889-6 £49.95

日本総代理店



A Cambridge University Press company

United Publishers Services Limited

1-32-5 Higashi-shinagawa, Shinagawa-ku, Tokyo 140-0002 JAPAN Phone (03)5479-7251 Fax (03)5479-7282

